

ちいき人権 World

発行
2022年度 春号 (No.106)

発行：世界人権宣言八尾市実行委員会
委員長 土田 紀康
連絡先 TEL 072-924-9853
FAX 072-924-0134
編集：「ちいき・人権・World」編集委員会

世界人権宣言 73 周年記念フェスティバル

せじ〜ん 73 動画配信開催しました！



も く じ

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 2 P 水平社創立 100 年
世人やお的私の水平社宣言 | 10 P..... せじ〜ん 73 報告 |
| 7 P 寮 美千子さん「聴く・語ることの力」
講演を聴いて | 11 P..... 白根さんと考えよう！世界の人権 39 |
| 8 P 「居場所」のない男、「時間」がない女
〜共に幸せになるために〜
/「朝が来る」上映会 | 12 P 新共有する時間は…part49 |
| 9 P 「不安」を「できる」に変えよう！
育休復帰後に向けた準備
/男女共同参画センター「すみれ」が移転しました！ | 13 P うーさんのおすすめ本
/じやりちえ日記 72 |
| | 14 P 気ままにおしゃべりシネマ 48 |
| | 15 P 勝手にきやらふる |
| | 16 P 2022 年度じんけん楽習塾のご案内 |

水平社創立 100 年

世人やお的 私の水平社宣言

今年は、部落差別からの解放、尊厳の回復をめざして結成された全国水平社創立から 100 年にあたります。結成宣言である「水平社宣言」は、被差別の当事者が発信した世界発の人権宣言とも言われます。「人の世に熱あれ、人間に光りあれ」は被差別部落のみならず、すべての人類の解放を呼びかけています。

昨年、世界人権宣言大阪連絡会議（世人大）が開催した、世界人権宣言 73 周年記念大阪集会にて、「私の水平社宣言」がそれぞれの立場からリレートーク形式で語られていました。

八尾においても、被差別マイノリティ当事者、またそれを支援する団体が活動しており、世人大の取り組みを参考に、「世人やお的 私の水平社宣言」として、加盟団体の皆さんから、人権が尊重され、差別のない社会づくりにむけた思いを、それぞれの立場で語っていただきました。

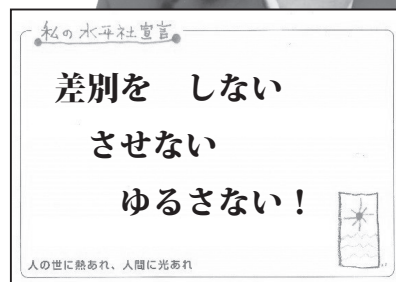
八尾市女性団体連合会 会長
八尾市人権啓発推進協議会 会長代行
角田 禮子さん

現在、会長代理を務める八尾市人権啓発推進協議会は八尾市内 33 団体が加盟する組織で、八尾市女性団体連合会も加盟団体の一つです。

女性団体連合会は、昭和 27 年（1952 年）の発足以来、差別を「しない、させない、許さない」の精神で時には寸劇を通じた啓発活動等も行ってきました。女性団体連合会発足当時の時代から、厳しい差別の現実を周りで聞いてきました。同和地区出身ということで結婚差別を受け、自殺未遂をはかった人のことや、当時は、会社の採用時に人事担当者が住む地域にやってきて身元調査をする就職差別の話もありました。

個人的には、先代の角田静子が八尾市同和教育研究会の副会長、会長を歴任しており、そこから長い長い取り組みをさせていただいています。

水平社結成から 100 周年ではありますが、100 年経ってもいまだに差別は厳然と残っていると思っています。しかもそれに加え、いまはネット空間や SNS 上におけるいじめや性被害、外国人に対する差



別等も深刻です。

人権を侵害することは人を傷つける刃物だと思います。だから人権は大事にしなければならない、差別は恐ろしいものなんだということを伝えていかなければいけないと思います。

団体はもちろんのことですが、人権協の中でも、皆さんと共にお力をいただきながら頑張っていきたいと思っています。

八尾市人権教育研究会 事務局長 水谷 圭子さん

1963年に「八尾市同和教育研究会（八同研）」として結成され、2002年に八尾市人権教育研究会（八人研）と名称変更した本会は、八尾市の小学校・中学校・義務教育学校に勤務する教職員を会員とし、自主的な研究活動を進め、日々、人権教育の確立に努めています。

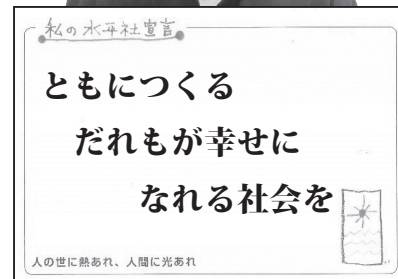
八人研活動の基盤となるのは、結成当事、子どもたちの長欠・不就学の背景に部落差別に起因する学びの不平等があることを見抜き、子どもや保護者一人ひとりに寄り添い、学校教育の在り方とも向き合いながら、人権教育を進めてきた先輩教職員の姿です。

わたし自身が、本当の意味での同和教育と向き合ったのは、13年前。理不尽な差別の現実直面するとともに、出会った子どもたちの姿に、わたしは戸惑い、悩み、苦しみ、そして多くのことを学びました。子どもたちだけでなく、同僚の教職員、保護者、地

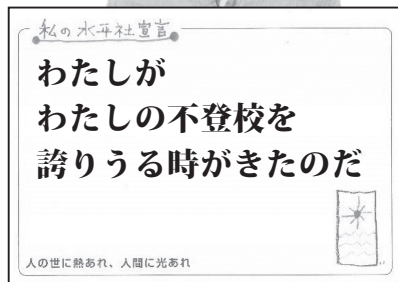
域の方など、関わるすべての人たちから、同和教育のぬくもりを教えてもらいました。

このぬくもりをすべての子どもたちに届けるため、一人ひとりの子どもたちを見つけることから始め、わたしたち教職員がつながり、力を合わせ、部落問題をはじめとするさまざまな人権課題の解決をめざす教育実践をつくっていきと思っています。

そして、だれもが安心して過ごせる集団を子どもたちに保障し、だれもが幸せな社会を築く子どもを、教職員だけでなく、たくさんの方々とともに、はぐくんでいきたいと思っています。



八尾市教職員組合 伊藤 秀一さん



小学生の頃の夢は学校の先生になることでした。それほど学校がだいすきだったわたしが中学生になってすぐ不登校になってしまいました。

「学校に行けない自分はだめな人間なんだ。」「今後一生社会に出ることなんてできない。」

自己嫌悪と孤独感で毎日押しつぶされそうになり、次第に人と会うのも怖くなっていました。

そんなわたしを支えてくれた一人がN先生でした。N先生は、ただそばにいてくれて私の話をうんうんと聴き、ありのままの自分を受容してくれました。

「やっぱりぼくは学校の先生になりたい！N先生のように誰かに寄り添える先生になる！」

そう決意をし、全日制高校へ進学。その後、休学、単位通信制への編入など紆余曲折ありましたが、な

んとか教育大学に入学することができました。

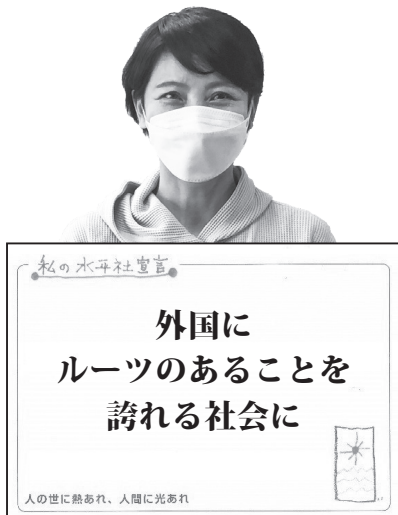
でも、わたしのなかにはずっとモヤモヤした思いがありました。それは「不登校の自分が学校の先生になっていいものだろうか」という思いです。不登校経験のある自分自身を肯定することができず、学校の先生になることに迷いがありました。そんな時に出会ったのが水平社宣言です。

その宣言の中にある「吾々がエタであることを誇りうる時が来たのだ。」という一文。自ら賤称語を用いつつ、さらにそんな自分を全面的に肯定する力強さに衝撃を受けると同時に、ずっと気持ちが楽になっている自分がいました。「不登校を経験し、学校に行けないうつらさを実感している自分だからこそ、できることがあるのではないか。」「人とつながることのあったかさに気づけたのは、不登校があったからだだったんだ。」そう思えた瞬間でした。

今となっては、不登校経験がわたしの教員の基礎となっており、不登校なくして自分はなかったと言えます。

そんなわたしだからこそこの水平社宣言・・・「わたしがわたしの不登校を誇りうる時がきたのだ」

八尾市在日外国人教育研究会 于 湊さん



八尾市在日外国人教育研究会は、外国にルーツのある子どもたちが、ありのままに生きていくことができ、また、すべての人々が一人ひとりのちがいを認め合い、ともに生きていくことができる多文化共生社会を築いていくことを大切に、在日外国人教育・国際理解教育のとりくみを継続して

います。各学校の在日外国人教育・国際理解教育のとりくみを交流し、多文化交流、進路保障のとりくみをすすめ、諸団体と連携し、実践交流会・研究集会・研修会を開催しています。

韓国・朝鮮人の子どもたちをはじめ、中国、ベトナムなど新たな帰国・渡日の子もたちや少数で在籍する子どもたちをエンパワーするとりくみを企画しています。「民族文化フェスティバル ウリカラゲモイム」では、各学校での民族クラブ等のとりくみを交流します。また「多文化キッズサマースクール オリニマダン」を関係諸機関とともに実施し、八尾に住む同じルーツのある仲間との出会いや交流、

社会福祉法人虹のかけはし 八尾市立障害者総合福祉センター 尾野 真衣子さん

社会福祉法人虹のかけはしは、2004（H16）年から、指定管理制度により八尾市に代わって八尾市立障害者総合福祉センターの運営管理を行っています。

当法人は、以下の基本方針のもと障がい者の支援を通して差別のない社会づくりを目指しています。

1. 障がい者の人権を尊重し、障がい者が権利の主体として平等に社会参加できる支援を行います。
2. 障がい者が地域で安心して暮らせる支援を行います。

また、障がい者差別のない社会は、普段からの地域社会とのつながりが大切であると考え、市民への障がい者の人権や障がい特性の理解と知識を深めるため、地域や学校に出前授業を行ったり、緊急災害時に備えた防災訓練など地域の行事に利用者さんとともに積極的に参加しています。

ルーツを知る活動などを通して、仲間との温かなつながりが実感できるよう支援しています。しかしこの2年間、コロナの影響で対面のとりくみは中止しました。その間、子どもたちが孤立していないか、不安を抱えていないか心配でした。

私は中国にルーツのある教員として日々子どもたちと向き合っていますが、ちょっとした生活習慣や国籍のちがいが、時折子どもたちに影を落とす場面に出会います。日本生まれの子どもたちも親が移民1世であれば、その国の生活文化を当たり前享受着しています。しかし、人間関係の中でそのちがいを自覚し、戸惑い、不安に感じることもあります。不利な立場に陥らないように場合によってルーツや文化のちがいを隠してしまう時があります。また、国籍のちがいはこれから巣立つ社会では大きな壁になるでしょう。外国にルーツのある子どもの中には、「警察官になりたい」という夢を持つ子どももいます。外国籍者は警察官になれないのでその時はとてもつらく感じます。

留学生として来日してから〇十年になりましたが、外国人ということで大なり小なり嫌なことは経験してきました。子どもたちが夢と希望を持って生きられる社会にしていくために外国にルーツがある教員として頑張らないといけないと思っています。

センターでは、特にパラリンピック種目の「ボッチャ」の活動を20年近く行っています。

「ボッチャ」は障がいのある人もない人も、一緒に競技をすることができるため、地域の小学生と障がい者と一緒に「ボッチャ」を通して、障がい理解

の授業を行っています。違いがあっても、工夫をすれば一緒にスポーツができる。できないから仲間外れにするのではなく、どうすれば一緒にできるようになるのか考えてもらっています。身近なところから小さな差別・排除をなくしていき、それが差別のない社会に繋がると思います。



部落解放同盟大阪府連合会西郡支部 支部長 岡 知彦さん

「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と高々に宣言されて開催された全国水平社創立大会から100年が経過しました。部落差別をはじめ、あらゆる差別解消について闘ってきた我々の組織が100年を迎えること、部落差別が厳しく横たわる現実を知っている我々にとって、祝っていいものか、嘆くべきなのか、複雑ではありますが、100年を迎えました。「もうそんなのはほっといて、家も商売をしとんねんから」と連れ合いさんから言われ、「よっしゃ、よっしゃ」と言いながら、ふろしきを肩にかけて商売行くふりして運動に参加していた。

これは西郡水平社を設立した初代支部長についての聞き取りの一部として残っています。1922年12月1日、全国水平社創立大会から272日後の出来事です。部落差別の実態はこの八尾にも存在し、同じ境遇を受ける仲間の結集に勇気をもらい、西郡水平社を創立しました。当時は危険思想とみなされており、阿波踊りの変装をして他の地域へ水平社設立運

動の応援に駆けつけることもあったことが、聞き取りとして残っています。全国水平社のその思いを継承し、実行した西郡水平社の設立にかかわったすべての諸先輩方に敬意を表したいと思います。

そして今、部落差別は残念ながら

現存し続けています。一方、国は部落差別解消推進法を施行し、八尾市は『八尾市「部落差別の解消に関する施策の方向性について」』と同問題に関するあり方がまとめられました。しかしながら、これらが「ある」だけで、差別がなくなることはありません。部落差別の実態を世に問い、反差別の思いを共有し、差別のをなくす運動を実行していきます。



私の水平社宣言

**私たちが大事にしたい
もの、地域の財産で
ある「あたたかさ」**

人の世に熱あれ、人間に光あれ



CAPプロジェクトやお 代表 梶山 恵美さん



私の水平社宣言

**自分のことをきめる
スイッチは自分自身が
持っている**

人の世に熱あれ、人間に光あれ



象は就学前の子どもたちから大人まで幅広い層に届けるワークショッププログラムです。

八尾市では毎年小学3年生全員に届けています。子どもたちには、自分の大切さイコール人権であること、自分には権利があり、自分のことは自分で決

めて、言っていんだよということを伝えています。3年生たちは、その「権利」の概念をととても素直に受け止めてくれます。一方中学生になると、そのことが意外にも受け止められない生徒が多いと感じます。あなたにも、相手にも権利があるんだってことがずとんと腑に落ちないのです。なぜそうなるのでしょうか。それは中学生になるまでの間に、暴力の加害者にも被害者にもなってきた体験から学んでしまった無力感や孤独感、あきらめもあるかもしれません。そして、自分のことは自分で決める経験が極めて少なく、生徒同士はもちろん、大人からの暴力に対してNO! といえる力が備わっていないことも要因の一つと考えています。

プログラム提供を通じてしんどい思いを抱える子どもたちの姿が見えてきます。自分の意見を表明することはとても難しいです。しかし表明しやすい環境を作るのは大人の責任だと思っています。CAPの取り組みを通じて子どもたちがいきいきと生きられる社会、その環境作りの一旦を担っていきたいと思っています。

NPO 法人 KARALIN 新開 ちあきさん

NPO 法人 KARALIN は、子育て広場を運営していますが、その根にあるものとして子どもや女性の権利を大切にしています。子育て中のお母さんたちは、社会の中でたくさんしんどい思いしています。私自身も子育て経験者としてその思いにとっても共感しています。そんな生きづらさを抱える人たちの力になりたいと KARALIN は取り組んでいます。

女性は結婚、出産を契機に〇〇の奥さん、〇〇ちゃんのママというように、“個”をなくされてしまいがちです。また広場に集まるお母さんたちは、子育てを一人で背負い込まされ、それに答えなければならないとプレッシャーを受けています。そういう中で虐待や産後鬱といった課題が見えてきたりします。それを一人で抱え込まなくていい、自分だけでなく他のお母さんも、共通のしんどさを抱えてる

NPO 法人自立生活センターやお川口 智恵美さん

校区の学校へ ～車イス生徒は初めてだった時代～

私は、両親が通わせたいという想いから、兄と一緒に校区の小学校へ行った。

1人では決めることが出来ない年齢で、当時の背景からすると、養護学校へ行く雰囲気になっていた。

同じ敷地内にある幼稚園へ通っていた。小学校へあがる時、校長先生が様子を見に来てくれたそうだ、私にはその記憶はない。

小学校・担任の先生とは別に、介助員さんがついていたけれど、学年が上がる事に1年ずつ交代してしまう。高学年になり、女子のグループが必然的にできていたが、よく分からなくて入ってもいけなかつた。

一人で過ごす時間が増えていたと思う。

養護学級にも「席」は置いていた。各学校に「〇〇学級」はあったのかな？

学級の集まりがあり、参加し始めた頃だった。

今になって思う事は、授業もついていけなかった（5・6年生の勉強は出来ていないまま）。色々な相談とか悩みは、

んだ、と気づける場所が子育て広場です。そこから先は、どう声を上げるか。しんどい状況は自分のせいではなく、女性、ママ、お母さんという立場に対する社会の見方なんだと思えるかどうか。ある意味、理不尽なことには怒っていいんだってことを気付いてほしいと思います。

日本は同調性がとても強く求められ、圧力として作用させる風潮があるように感じます。多様性が叫ばれる中、個々が尊重され、女性であることで抑圧されない社会が求められていると思います。

両親に打ち明けることが出来なかった。

中学校・私が小学校の頃、色んな事が出来ていたことを知っている同級生は、不思議に思っていたのだろう。例えば、移動教室に行くのに時間がかかるため、少し早めに授業を終わらせてくれた教科担任の先生がいた。しかし、同級生にしたら、早めに終わる行為を問題視され、話し合いの結果、同じ時間帯に授業を終えた。1人で着替えをしていた私は他の生徒において行かれ、授業は進んでいた。けれど、気がついて見に来てくれた。

また、中間テストなどは始め、教室にて受けていた。解答用紙に半分しか答えをかけなくて、別室受験と時間延長をお願いした。クラスメイトは私がテストを終わるまで待っていた。「早く帰れるのになんで、待たないといけなの？」と不満を持っていたと思う。

誰かに「してもらうのが当たり前」と思っていた時期。しかし実際は違い、『感謝の言葉』が分かるまで長い年月がかかる。それは、電動車イスに出会うまで知らなかった。

「伝えることの大切さ」が必要なのは、分かる。言葉は浮かんでいる。でも伝えることができない。学校時代から両親とかに自らの気持ちを言えなかった。当時「両親にどのような言葉で伝えたら良いのか？」分からないまま。現在も「声に出して伝える」のが苦手だ。



私の水平社宣言

理不尽なことには
怒ってもいい！
抑圧されない社会を



人の世に熱あれ、人間に光あれ



私の水平社宣言

幼い頃から友と学び、
これからも学ぶ人生。
教わった事・経験した事を
伝えていく私でありたい。



人の世に熱あれ、人間に光あれ

一般社団法人 Green 代表理事 田中 律子さん

一般社団法人 Green は八尾市で 1 か所「café ROWAN」、柏原市で「たんぽぽ」「ひまわり」「ポプラ」の 3 か所、精神障害を持つ方のための就労継続支援 B 型事業所を運営しています。

私が精神障害を持つ方に関わる仕事を始めたのは 1996 年です。当時は「共同作業所」職員として、当事者の方々、家族の方々に教えてもらったことが沢山あります。その中でも、差別を受け、偏見を持たれることによる大きな痛手を教えてもらいました。その痛手から、精神障害について誰にも知られたくないと孤立し、行き場を失くしてしまわれることもありました。精神疾患・障害そのもの以上に、差別や偏見が、人を生きづらくさせていることは、変わってきたところ、良くなったところはありますが、今も続くものに感じます。

水平社宣言と同じ時期の言葉に、1918 年「精神病患者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」（精神疾患

者への対応の調査報告 ※）の中にある、「わが邦十何万の精神病患者は実にこの病を受けたるの不幸の他に、この邦に生まれたるの不幸を重ねるものというべし」という言葉が、精神障害による苦しみだけでなく差別の怖さや苦しさを言い表しているように感じます。

「精神障害を（いろんな個性を）持つことを誇りうる」と、一人一人が、その人らしく、発信できる場所や時間を作っていきたいと考えています。

※ 1900 年に帝国議会で精神病患者監護法が制定されました。精神病患者監護法による私宅監置の状況を、東京大学医学部精神病学教室の呉秀三らが『精神病患者私宅監置ノ実況及び其統計的観察』（1918 年）で当時の調査報告をまとめています。



私の水平社宣言

一個だけのわたし、
一個だけのあなた。

人の世に熟あれ、人間に光あれ



寮 美千子さん「聴く・語ることの力」講演を聴いて

作家・詩人の寮 美千子さんは 2007 年～2016 年まで奈良少年刑務所で社会性涵養プログラムの講師を務められた。文章を読む、演じる、詩を創るという授業を通して、少年たちが変化、成長していった過程を楽し

く、時には涙しながら語ってくださった。寮さんの授業に参加した子たちは当初、おびえている子、態度の悪い子、周囲に無関心な子、言葉が出ない子など刑務所の中でもトラブルメーカーになってしまっていた子たちだった。

まずは絵本のセリフを読むことから始められたそう

だ。誰かが勇気を出して、一生懸命絵本のセリフを読む。すると皆から拍手が起きた。驚いて「拍手もらってうれしかった」「読めてうれしかった」と笑顔になっていく。励ましたり促したり、そして大切なのは待つこと。そうやって進めるうちにどんどん積極的になり、自分のことを詩に書いて発表までできるようになっていく。お互いのことを応援したり認めたりして受け入れ合っていくようになる。少年たちが成長していったお話を聴いていると、私もワク

ワクしたり感動して涙がこぼれたりした。

寮さんもおっしゃっていたが、人が育つのに必要なことは安心して話せる場、人、時間なんだと痛感した。少年たちが取り返しのつかないような犯罪の加害者になってしまう前にこの環境を大人たちが作ってあげていたら…と考えずにいられなかった。

凶悪といわれる犯罪を犯した少年たちと向き合う授業は覚悟が必要だったと思うけれど「奈良刑務所は歴史のある大変美しい建物で、最初は中が見られるということにつられてお話をうかがいに行っただですよ」と話されていたのがとても印象的だった。刑務官でもなく教育者やカウンセラーでもない寮さんは、気構えずに一人の人間として少年たちと向き合っていたんだな、だから皆も心を開いていくことができたんだろうなと感じた。

私も地域のおばちゃんだ。[CAP] のプログラムを通して、一人の人間として子どもたちに出会っていくこと、安心できる場を作り、子どもたちの声を聴くことに意味があると再確認できた。子どもたちを暴力の被害者にも加害者にもしないために、自分にできることをあきらめずやっていきたいと思う。

（めぐりん）

2021（令和3）年度 第2回人権啓発セミナー

「居場所」のない男、「時間」がない女～共に幸せになるために～

日 時：2022（令和4）年
1月24日（月）～2月10日（木）
方 法：YouTubeの限定配信
講 師：詩人・社会学者
水無田気流（みなしたきりう）さん



講演では、男性と女性がそれぞれ抱える背景を軸に、男女共同参画社会の実現について統計的にお話いただきました。また、時代とともに変わってきたCMを交えながら、分かりやすくお話いただきました。セミナーを通して、わたしたちが今後どういう生き方をすべきか考えるきっかけとなりました。

～参加者の感想～

●時代を反映したCMやデータに基づく説明で分かりやすかった。

●女性もそうだが特に男性の意識改革が必要だと思います。男女同権を定着させなければならないと考えます。

●40歳以下の世帯は、共働きも増え、家事、育児、仕事も平等であるので、少しずつ変わっていているな、と感じます。今後、少しずつではありますが、意識が変わり、全ての人が過ごしやすい社会になるように、職場環境の改善に努めていきたいと思います。

●男性・女性両方の視点から様々な問題点が取り上げられていて共感しやすかったです。まさに現代の日本が向き合っていくべき問題だと感じ、改善されることを願います。これからもっと家事を積極的にやろうと思いました。【働き方改革＝暮らし方改革】であることが分かりました。

2021（令和3）年度

第2回人権映画上映会 「朝が来る」

子どもの人権について考える機会とするため、特別養子縁組をテーマとした映画「朝が来る」の上映を実施しました。映画を通して、子どもの人権をはじめとした様々な人権について考えるきっかけとなりました。

〈映画あらすじ〉

実の子を持てなかった夫婦と、実の子を育てることができなかった14歳の少女を繋ぐ「特別養子縁組」によって、新たに芽生える家族の美しい絆と胸を揺さぶる葛藤を描く。血の繋がりが、魂の繋がりが…現代の日本社会が抱える問題を深く掘り下げ、家族とは何かに迫り、それでも最後に希望の光を届ける感動のヒューマンドラマ。



日 時：2022（令和4）年3月29日（火）
14時～16時30分
場 所：八尾市生涯学習センターかがやき
4階大会議室

～参加者の感想～

●映画を見て初めての事柄を考える機会となり、大変良い経験になりました。

●ドキュメンタリー映画を見ているようでした。人権について色々考えることができました。

●とても感動しました。考えることが多く、相手を思いやることは難しいけれど、とても大切だと思った。

●とても繊細で難しいテーマではありましたが、娘をもつ一人の母として、女性の人生がもっと広く守られていく世の中の仕組みであってほしい、と感じました。

●映画を通して、子どもの人権だけでなく、様々な人間の想いや人生を感じることができ、とてもよかったです。



2021(令和3)年度 産前産後休暇・育児休業中の女性向けセミナー

「不安」を「できる」に変えよう！育休復帰後に向けた準備

～職場準備に家庭準備、いろんな準備を整理～を開催しました！！

日 時：2022(令和4)年2月10日(木)

10時～12時

方 法：ZOOMミーティング

講 師：育休後シニアアドバイザー

石倉和美(いしくらかずみ)さん

産育休中の女性を対象に実施し、15名の方にご参加いただきました。

- ・復職前に何を準備しておいたらいいのだろう？
- ・家族以外頼る人も身近にいない...
- ・復職すると今までのように時間を使えないけど、キャリアアップもしたい...など

漠然とした不安を抱えている方は、たくさんおられます。

本セミナーでは、モチベーションを維持しながら、職場でも能力を発揮し、バランスよく働き続けるためのコツについて学びました。各自、根底にある考えを明確化するとともに、すぐに実践できる時短術や役立つサービスなどの情報提供がありました。また、頼れる物や人を増やしていき、助け合いながら成果をあげる「ヘル

プシーキング」という考え方が、子どものためにも、大人のためにもなるということを学びました。

また、今の時代は、育児だけでなく介護問題を抱えながら働いている人も多く、過剰な配慮は遠慮しつつもお互いが寄り添い、また、受けた恩は次世代に繋いでいくという相互扶助の考え方が伝えられました。

参加者のみなさんからも、「漠然とした不安が具体的に考えられるようになった。」「辞めようかなとも思っていたが、セミナーに参加して夫婦で協力しながら乗り越えたいと思いました。」などの声をいただいています。



子育て中に限らず、漠然とした不安や悩みは、具体化してみることが解決の第一歩になりますね。

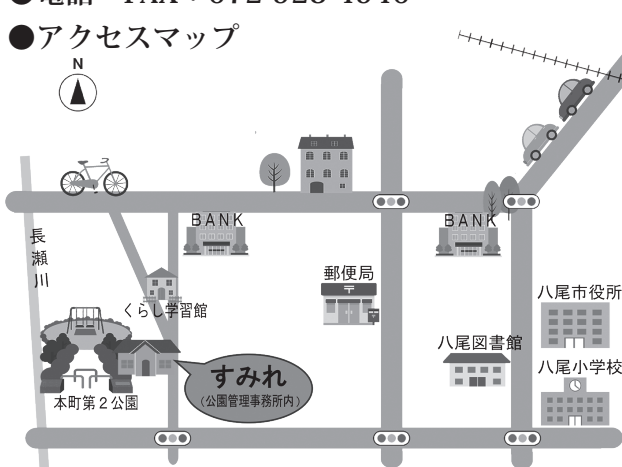
4月から男女共同参画センター「すみれ」が移転しました！

●移転先：八尾市本町3丁目9-7(八尾市公園管理事務所内)

●開所日時：平日 9時～17時(年末年始は除く)※別途、すみれ出張事業日は休所となります。

●電話・FAX：072-923-4940

●アクセスマップ



すみれでは、男女共同参画社会の実現をめざして、市民の交流、情報の発信、女性相談事業などを行っています。

本を借りることができる図書コーナーもあります。

お気軽にお越しください。

引き続き、よろしくお願いします。



詳細はこちら
すみれ HP



すみれ Facebook



世界人権宣言 73 周年記念フェスティバル

せじ〜ん73

動画配信開催しました！

配信日：3月19日、20日、21日



土田紀康実行委員長の挨拶から…



わかでぼうのインタビュー



CAPプロジェクトやおのCAPニクスでひゅーペンとダンス！！

1948年に採択された世界人権宣言

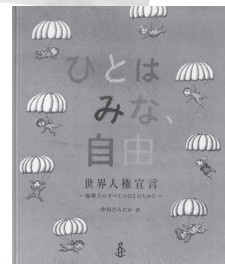
今年は73周年を迎えます。



人権が大切され、差別のない平和な社会の実現をめざして

世界人権宣言八尾市実行委員会の団体や関係者が、

歌で、踊りで、ピアノ、合唱、合奏を通しアピールしました♪



ハンドベルとウクレレで合奏しました



CAPからネット&ココレレ

おかんと西ちゃん



水平社宣言の朗読

水平社宣言
～人の世に熱あれ、人間に光あれ～

1922年3月3日
全国水平社が京都の岡崎公会堂で創立された。



世界人権宣言
ひとはみな、自由
絵本の紹介

ひゅーペンも踊ったよ～



千華鏡、恒例の「世人の輪」

白根さんと考えよう! 世界の人権40

国際NGO「CCPR センター」「ISSYO」所属 白根大輔

勝者のいない戦争

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって以来、毎日のようにウクライナ現地の惨劇・被害のニュースが飛び込んできます。2月末の侵攻開始以来続く爆撃や戦闘ですでに数千人の死者が出ており、国連の発表によればこれまで1千万を超える人が国内、国外で難民となっています。戦争犯罪に該当するような軍事・殺戮行為も確認されており、3月に行われた国連人権理事会ではロシアによる国際人権法及び人道法違反を調査する決議も採択されました。また難民として避難をしている人のほとんどは女性や子どもたちですが、ロシア軍による直接的な軍事行為の被害だけでなく、ウクライナ国外に脱出を試みた無数の人たちが今度は逃げ延びた国境や隣国で人身売買の罠・被害にあっているという報告もあります。

本来このような事態を防いだり、より速やかな解決を導いたりするために設立された国連安全保障理事会は、加害者である当国が拒否権を持つ常任理事国としているため、全くの麻痺状態となり、何ら効果的行動を取っていません。各国による経済制裁、貿易取引の中止、ビジネスのボイコット、国際会社によるロシアでの営業行為の中止や撤退、スポーツの分野でもロシア人アスリートの国際的な競技参加さし留めなどが行われていますが、それがどれだけ今回の戦争を開始した張本人に届いているか、影響を与えうかはまだ不明です。ウクライナとロシア、2国間の和平交渉も開始されましたが、まだ先行きは不明なまま、ロシアによる侵攻が継続されています。

一方ロシア国内では、当局が今回の侵攻をあくまでウクライナで悲惨な状況にあっている人々（ロシアの大統領はウクライナで虐殺の対象となっている人々としています）の救出を目的とする「特別軍事作戦（Special Military Operation）」であるとして正当化し、全ての非はウクライナ政府及び西側諸国にある、という「情報」を政府統率下にある国内報道機関やソーシャルメディア（独立したメディアはこれまでにほぼ全て閉鎖されています）を通して流布しています。オンラインのものも含め、もともと表現や報道の自由が極

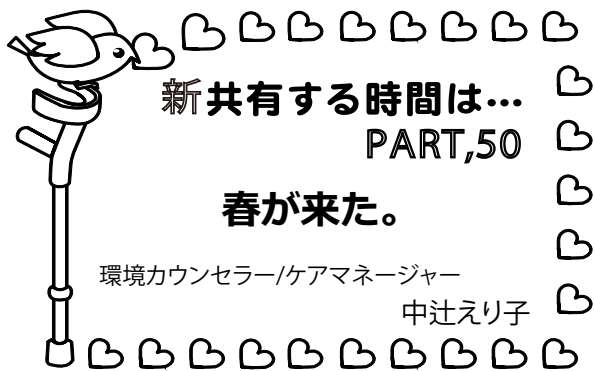
端に制限されている中、当局によって統制されたメディアが国内多くの人にとっての主要、または唯一の情報源となっていることを考えれば、今ウクライナで何が起きているか、ロシア軍がどのような行動をとっているか、実際知らない人が多くても驚きではありません。（ちなみにVPNなどを使えばロシア政府により規制されていない「他」の情報も手に入れることができますが、一体どれだけの人がそのような試みをしている、できるかは不明です。おそらく日本の状況と比べてみれば多少の見当が付くかもしれませんが、例えば日本のどれだけの人が日常、テレビやソーシャルメディアも含め、日本国外から発信されているものや日本語以外のニュースを情報源としているでしょうか。）

3月に入りロシア政府は一連のウクライナ侵攻（上記のようにロシア国内の公的な呼称は「特別軍事作戦」）に関して「偽」の情報を流布したものは懲役15年以下に処されるという法律を制定し、国内の表現・報道の取り締まりをさらに強化しました。少しでも当局の行為に疑問を唱える人は反逆者、裏切り者というレッテルが貼られ、ウクライナを支援するような言動はもちろん、戦争に反対する個人や団体に対する逮捕や解雇、脅迫というケースがすでに報告されています。

世界ではあちこちの国でウクライナ支援に並行し（一部にはロシア支援をする声もありますが）、ロシアへの非難・反感が高まっています。そんな中、「ロシア嫌悪（Russophobia）」という言葉が耳にすることも多くなりました。この言葉自体の使われ方は様々で、中にはロシアの行動を擁護する目的で使われている時もありますが、ロシアのウクライナ侵攻（及び侵攻を決定し、継続している国家の首脳部）への反対・反感が、一部ではロシアという国やロシア人全般に対する嫌悪というレベルに達し、実際に形となって現れてきている証拠でもあると思います。

例えばロシア国外に在住する私の知人は、ロシア人ということだけで（本人はウクライナ系ロシア人であり、ウクライナ侵攻にももちろん反対、国家の首脳部を支持しているわけでもありません）、職場で無視・疎外され、子どもたちも学校で同様の目に合っている、と話していました。このような（またはそれ以上の）状況はあちこちで起きていて不思議ではありませんし、ウクライナ侵攻がどのように収束するかにもよりますが、今後ますますエスカレートする可能性もあります。

ロシアにとって、果たしてこれは誰のための、何のための戦争なのでしょう。



環境カウンセラー/ケアマネージャー

中辻えり子

今年の冬はことのほか寒さを強く感じました。天気予報からは東日本に大雪警報やホワイトアウトへの注意、西日本の太平洋側でも氷点下の気温が報じられる日がありました。極寒2月の北京オリンピックその後のパラリンピックも世界的な新型コロナウイルス感染拡大に対して、厳重な防止対策をとっての開催でしたが、氷点下10℃以下の屋外競技他、TVに映る選手達の演技や表情に感動することが多

かったことを覚えています。それとともに記憶に残ったのが2月4日(立春)開催の開会式の映像でした。

調べてみると、古代中国では、1年12か月を4時に分け(四季)、1・2・3月は春、4・5・6月は夏、7・8・9月は秋、10・11・12月は冬で、冬至と春分の中間点を正月として、春の最初の節気に当たったようになったことで「立春」と名付けられたとありました。1年を24に分けたものを「二十四節気」、72に分けたものを「七十二候」と表しています。立春から1年が始まる(オリンピックが始まる)ということだったのでしょうか。季節感あふれる演出が会場に広がっていました。日本では明治6年に太陽暦を基にしたグレゴリオ暦(新暦)を採用したことで、旧暦と違って年初の定義が変わっていますが、二十四節気・七十二候は今も季節を表す言葉として伝えられています。七十二候は鳥や花、気象などの様子で自然の移ろいを細やかに表しています。春と夏のはじめの頃から見ると…。

二十四節気	七十二候			
立春	東風解凍 黄鶯眼眩 魚上氷	はるかぜ こおりをとく うぐいす なく うお こおりをいずる	第一候 第二候 第三候	2月4日頃 2月9日頃 2月14日頃
雨水	土脉潤起 霞始韃 草木萌動	つちのしょう うるおいおこる かすみ はじめてたなびく そうもく めばえいずる	第四候 第五候 第六候	2月18日 2月23日頃 2月28日頃
啓蟄	蟄虫啓戸 桃始笑 菜虫化蝶	すごもりのむし とをひらく もも はじめてさく なむし ちょうとなる	第七候 第八候 第九候	3月5日頃 3月10日頃 3月15日頃
春分	雀始巢 桜始開 雷乃発声	すずめ はじめてすをくう さくら はじめてひらく かみなり すなわちこえをはっす	第十候 第十一候 第十二候	3月20日頃 3月25日頃 3月30日頃
清明	玄鳥至 鴻雁北 虹始見	つばめきたる こうがんかえる にじはじめてあらわる	第十三候 第十四候 第十五候	4月5日頃 4月10日頃 4月15日頃

漢字からの想像とひらがなの持つやさしさから、言葉の響きが五感に伝わってくるように感じられました。

東日本大震災から11年が過ぎた3月11日には、地震や災害について再度の意識をしたと思った矢先の3月16日、大きな地震が発生し東北新幹線の脱線や断水が続いたことやその後の日本各地での地震、大阪でも体を感じる震度1の地震がありました。新型コロナウイルス感染者数のグラフが緩やかに下降してきたと思っていたら、減少が少しずつ増加に転じ、感染力がより強いオミクロンの変異株「BA2」

に代わってきています。対策を強化している高齢者施設でのコロナ感染の報告が、耳に入ってきています。ニュース報道では、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が止まりません。大きな歴史的背景と政治的な動きを伝えながら、刻々悪化する様子が映し出されています。人により人の命が脅かされています。

桜咲き、燕の飛来する季節の到来です。心穏やかに「春が来た。」と言える日が来るようお願いしながら…。(娘の出産から4月1日の退院で、孫との対面を待つ「春」です。)



デンマークの学校教育のお話を聴く機会があった。その中で印象的だったのが民主主義（デモクラシー）について。例えば、教育で一番必要なことは？という問いにほとんどすべての先生が「Democracy」と答えるらしい。

それは小さい時から始まっていて、幼児教育の法律に「デモクラシーの決定に参加し、その責任を持つこと。デモクラシーを理解し、経験すること。そのための自立、人間関係（自分の属する社会）への貢献、デンマーク社会をつくる一員として参加することをサポートすること」と定められているとか。生まれた時から社会の一員として考えられていて、民主主義の考え方が暮らしの中に根付いているみたい。民主主義は多数決じゃなくて、「社会は私たち一人ひとりがつくる」という考えがみんなの根底にある。だから、年齢や立場に関係なく自分の意見を伝え、相手の意見を聴くのが当たり前。

それに対して、日本の民主主義は、「選挙」や「政治」のイメージが強いから、なんとなく面倒で、自分たちの暮らしから遠く離れている感じがあるのが現状。

それでも「自分たちのことは自分たちで決めたい、変えていきたい」という思いで何かを始めていった人たちが、あちこちにいる。その活動のいくつかを対談形式で紹介されているのが『自分で始めた人たち 社会を変える新しい民主主義』

活動の広がりや経緯や、地域社会が少し変わっていった話等があって、自分でも何かを始める勇気が湧いてくるかも。

一人一人の小さな活動の積み重ねから静かに少しずつ「社会は私たち一人ひとりがつくる」民主主義が広がっていくと良いなあ。



『自分で始めた人たち
社会を変える新しい民主主義』
宇野 重規著 大和書房



じゃいちえ日記

VOL72

現在の世の中

コロナ禍の生活様式には、変わらない。

世界では今、新たな火種が吹き荒れている。だれも望んでいない戦争に。

中学時代、平和学習で「広島」へ。『被爆者体験の話』、『原爆資料館』などへ、見に行った。

当時「学習の一環」だったので、クラスメイトと資料館を見に行くことができたり・貴重な話を聴くことができた。もう一度、見に行くことはできない。

あの惨劇は、もう見たくない。それほどの資料館の展示物は、私の中に今でも頭の隅に残っている気がする。

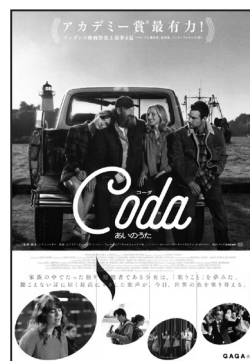
現在、惨劇が「テレビ」でながれている。今年の2月終わり頃から、ロシアとウクライナの戦争報道として流れているが、見ていられない。その為、チャンネルをかえることもある。

いつも巻き込まれてしまうのは、女性や子どもそして、立場の弱い人々たちなど。早く悲劇な戦争は、終息してほしいと願う。

非核三原則「持たず、つくらず、持ち込ませず」を日本は貫いてほしい。そして、世界中が平和な世の中にと願うばかり。戦争のない平和な社会になりますように。



耳まにおしゃべり シネマ vol.49



コーダ あいのうた (2021 年 アメリカ)
監督/シアン・ヘダー
主演/エミリア・ジョーンズ

E: Children of Deaf Adults の頭文字をとった「CODA」という言葉にこの映画で初めて出会った。コーダは両親のどちらかでも耳の不自由な家庭で育つ子どものこと。数年前、まさにそんな子に出会ったけど、大人びてしっかりした中学生だったなあ。

Y: しっかりしないといけない環境だったんだね。筆談はできても手話はハードルが高いなあ。高校生のルビーは勉強以外でとても忙しい。両親と兄も難聴者で、健常者の彼女が乗船するから漁業で生活ができたし、魚の競りで交渉するのも彼女の役割。

E: 状況を見ながら直訳したり意識したり、時には端折ったり。表情と身振り手振りで怒りは十分伝わるけど、父のスラングを伝えるって大変。家族のことでも客観的な見方もしながら、瞬時に伝えるのがすごい。家の中で話し声はなくても日常のいろんな音に音量調節はなくて、結構賑やか(笑)。

Y: 衝撃的だったのはルビーが生まれた時、耳が聴こえると知ってショックだった、と母が話すところ。聴こえない彼らにとっては、聴こえる人が異質なものの。たしかに不便は感じていても彼らは楽しくやってる。両親はよく働くと陽気で家族仲もいい。ルビーがいたら仕事も自分達だけでできる。ルビーが違う世界にいくと傷つくんじゃないかと不安で心配でたまらないんだと思う。

E: でもルビーは家族に支障のない範囲でしかやりたいことができない。ものすごい葛藤を抱えてる。歌うことが好きで、才能があるから音大に進むように言われてもどう伝えたらいいかわからないし、自分がない家族を想像できない。

Y: 娘の可能性を信じない勝手な親たち、と初めは思ったけど、それは想像力のなさ。劇中で音のない世界を体験すると、すごいね、聴覚からでないものを感じることができた。

E: コーダは 1980 年代から子どもたちが抱える困難が見えてきて使われ始めた言葉。家庭では手話が言語コミュニケーションなのに世間では通じない。表情や手の動きを奇異な目で見られたり、家族から離れられず社会と遮断されたり。

Y: 状況は変えられないと思っていたことも、ルビーが自分の夢に向かっていくことで家族みんなが前向きになれた。そんなことはいっぱいあるんじゃないかな。みんな勝手に思い込んで壁や限界を感じることに。

E: 最近子どもの声を知らないという耳の不自由な家族のドキュメンタリーを見たばかり。言葉を覚え始めた子が一生懸命言いたいことを伝えようとするけどなかなか伝わらなくて。泣いて怒っても親は聴こえない、でも一生懸命わかろうとする。そんなやりとりがルビーにもあったと思う。家族だけで完結することではないから、社会全体がもっと寛容であってほしい。リメイク製作過程では、本当に耳の不自由な俳優が演じることに一部抵抗があったらしいけど、キャスティング全てに拍手(手をひらひら)したい!!

勝手にきまってる

71

<私の精神病の歴史>

海田 若菜

今回からは私が精神病になったきっかけ、その後の経緯など、私の精神病の歴史を連載していきたいと思います。

私は幼少期から人見知りで内向的な性格でした。人前で自分の考えを言うなんて考えられない、今とは真逆の女の子でした。八尾市の中学校に進学した時、私の時代は教師による体罰が横行していました。私は親にも叩かれた事がなかったので、体罰を振るう教師の存在は恐怖でした。中学校に入学してからすぐに卒業する日をただひたすら心待ちにしていました。

進路を考えるべき時期が来た時、私はこのまま大阪の高校に進学しても卒業出来る自信がありませんでした。そこで知り合いの紹介で、島根県の片田舎にある全寮制の少人数の高校を選びました。その高校は責任の主体たる独立人の育成を掲げていて、生徒の主体性をとても大切にしていました。学校や寮の校則なども全員で話し合いの場を持ち、最終的には生徒と教師の多数決で決めていました。その3年間で私は自分から人に心を開くこと、自分の考えを持ちそれを人前で発表する事、自分らしくある為に努力する事を学びました。

大学は香川県にある大学の社会福祉学科に進み、児童福祉関連の仕事に就きたいと思っていました。大学4年生になり、後は卒業論文と就活を残すだけとなり、私はボランティア活動や所属していたサークルの部長としての働きを重要視しました。それらは就職してからはあまり出来ない事だと思ったからです。しかし、リーダーシップを高校で習ったとはいえ経験が浅く、元々持っている賜物ではなかったので、責任ある立場に立って話し合いを進めたりみんなの意見をまとめて1つにするのはとても大変でした。私はどんどんストイックになっていき、1日寝なくても人間は死なない、1食食べなくても大丈夫と無茶をしてしまっていました。そんな時、リーダーとして周りから非難されることがあり、ショックで過呼吸発作を起こしてしまいました。

過呼吸はこの時が初めてでどうすれば良いのかわからず、呼吸が整うまでに何時間もかかりました。無理をしたんだと自覚し1週間ほど寝込み、もう大丈夫だ！と活動に戻りましたが体がついて行かず、再び寝込んでしまい、休養のために八尾の実家に帰ることになりました。

実家に戻った私を見た母に、一緒に病院に行こうと言われました。

つづく

新 2022 年ご案内



じんけん 楽習塾

じんけんを「他人ごと」から「自分ごと」へ

じんけん楽習塾は1998年から続いている人権学習講座です。

「じんけん」は「他人ごと」でなく、「自分ごと」です。ここにはワークショップで人権を学びたい人、ファシリテーターのスキルを学びたい人、人権学習を企画する人、いろんな人が集まってきます。出会いが楽しみなのも楽習塾の魅力です!みなさんも参加してみませんか? 参加お待ちしております!

日時 2022 年5月～7月 全6回 水曜日 18:30～21:00(最長)

参加費 6回通し 3000円 (学生 2000円)

1回 700円 (学生 500円)

場所 安中人権コミュニティセンター 2階 (JR八尾から徒歩12分)

〒581-0085 八尾市安中町八丁目5番30号

(今年度はプリズムホールが全館改修工事で使用できないため、会場が変更されています。)

◆定員 先着20名まで 事前申し込み願います。

新型コロナウイルス感染対策のため、会場参加は20名に限定して開催します。必ず事前にお申込み下さい。

◆Zoom 配信

各回 Zoom 配信いたします。参加費は無料です。ただし、視聴のみになります。

会場でのグループワーク時も視聴になり Zoom 内でのグループワークは原則ありません。

ご了承の上、ご参加下さい。



じんけんにゃんだふる



日時	テーマ	ファシリテーター / 講師
1 5/18	いっしょに「水平社100年宣言」をつくろう!	森実 (じんけん楽習塾)
2 6/1	障害のある子の発達と放課後の性	坂爪真吾 (一般社団法人ホワイットハンス)
3 6/15	詩のうまれくるところ～ハンセン病文学を語る～	姜信子 (作家)・渡部八太夫 (祭文語り)
4 6/29	「山奥ニート」やっています。	石井あらた (山奥ニート)
5 7/13	マジョリティ特権って何?	出口真紀子 (上智大学)
6 7/27	今、この時代にあらためて考える ーあなたは民主主義を信じますか?	長橋淳美 (一般社団法人富田林市人権協会)

■一時保育あります。申込みは1週間前まで、下記までお問い合わせ下さい。(無料)

■問い合わせ・参加申し込み: 一般財団法人八尾市人権協会

TEL 072-924-9853

FAX 072-924-0134

mail oyaoya@oyaoya.org

FAX、メールでのお申込みは、お名前、メールアドレス、所属、連絡先、会場かオンライン参加のいずれかをご記入の上、お送り下さい。

